

北海道大学専門科目担当 TA に関する アンケート調査の分析

山田 邦雅^{1)*}, 細川 敏幸¹⁾, 西森 敏之¹⁾, 安藤 厚²⁾

¹⁾ 北海道大学高等教育機能開発総合センター, ²⁾ 北海道大学大学院文学研究科

Analysis of Questionnaires Administered to TAs and Teachers of Specialized Subjects in Hokkaido University

Kunimasa Yamada^{1)**}, Toshiyuki Hosokawa¹⁾, Toshiyuki Nishimori¹⁾ and Atsushi Ando²⁾

¹⁾Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University,

²⁾Graduate School of Letters, Hokkaido University

Abstract — In 2007 we developed two questionnaires for the purposes of the study: one for Specialized Subject TAs and one for teachers who hire them. We hoped to learn more about their circumstances. We surveyed three departments, Information Science and Technology, Fisheries Sciences and Veterinary Medicine. Especially in these departments TA training was earnestly put into practice. Of the TAs, 85.7% reported that they thought they treated students well, 89.8% indicated that they enjoyed the job, and 57.1% felt that they were suitable for teaching. Among the teachers, 45.8% reported that they guided TAs sufficiently and 29.1% of teachers had been TAs in their school days. After analyzing the data, it was concluded that all TAs who had given lectures felt a sense of fulfillment.

(Revised on 2 September, 2009)

1. はじめに

2006年、北海道大学高等教育開発研究部は、平成18年度前期に全学教育においてTAとして働いていた院生およびTAを使用した教員を対象に、TAの職務と生活の現状に関するアンケート調査を行った(2007 宇田川)。TAに対するアンケートでは、院生の属性、TAとして働くことになった経緯、TAを行うに際しての準備、仕事内容、行って見た感想、そして学生生活などについて聞いた。一方、

教員に対するアンケートでは、教員の属性、TAに対する指導、TAを使用した感想などを聞いた。これによると、9割以上のTAが、仕事がうまくでき、7割以上がやりがいを感じ、8割以上が学生とうまく接することができ、今後もTAをやりたいと感じていた。また、TAを使用した教員の9割以上が、学生を教えることが好きであり、その授業にやりがいを感じ、TAの能力に満足しており、今後もTAを使いたいと感じていた。

このアンケート調査は、北海道大学が毎年行って

*) 連絡先：060-0817 札幌市北区北17条西8丁目情報教育館4F 北海道大学大学高等教育機能開発総合センター

***) Correspondence : Research and Development Center for Higher Education, Hokkaido University, Joho-kyoiku-kan 4F, Kita17 Nishi8, Kita-ku, Sapporo, 060-0817, Japan

いる全学教育科目に対する TA 研修会が効果的に機能し、TA 業務が円滑に行われているかを確認することが目的である(2006 小笠原ら)。また、もっと大きな視点で、TA という仕事が、TA として働くことの目的「大学院生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会」に適ったものになっているかどうかをみることも目的でもある。

そもそも TA という制度自体、現場で働く教員が必要に迫られてできたものではなく、1991 年の大学審議会での提案、そして予算配分されて始まったものであり、それまで院生の活動として研究のみを重視してきた教員は、むしろ TA の使い方に戸惑いを感じたという経緯がある。

しかしその一方で、TA という制度をまさに必要としていた学部も存在する。それは、学生の指導のすべてを逐一教員がやっていたのでは、きめ細かな指導が困難であるような、実験や実習を主体とするカリキュラムを構成している学部である。現在まで、大人数の学生の演習をやむを得ず 1 人の教員で対応していたような学部では、TA という制度は教員のわずかな増員よりもむしろ効果的であったといえるのではないだろうか。

そこで今回、2006 年の全学教育のアンケートとほぼ同じ形式のアンケートを、北海道大学の中で特に TA 制度を必要とし活用してきた 3 学科に依頼し集計、考察した。依頼したのは、工学部情報科学研究科、水産学部、獣医学部である。3 学科とも、カリキュラムに実習や実験が多く、これに TA を活用するために、学部で独自の TA 研修を行い、またその研修を単位化しているところまでである。

2. アンケート調査の目的

先に述べたように、今回のアンケートの主な目的も、TA 研修会の効果の確認、そして将来の教育者のためのトレーニングとして TA 制度が機能しているかどうかの調査である。とくに今回注目する 3 学科においては、カリキュラムの構成要素として TA が不可欠な形で組み込まれている。それに伴って、TA トレーニングは重要性を増し、高等教育機能開発総合センターが開催している全学教育科目に対す

る TA 研修会とは別に、各学部で活用できるように独自の実践的なトレーニングを行っている。このような状況で、多くのトレーニングを積んでいる TA に対するアンケートでは、全学教育科目での TA に対するものとどのような違いが出るのかが今回の注目すべき点である。

アメリカでの TA の活用は、日本のそれとはだいぶ異なっている。TA は教員と同じように 1 クラスを 1 人で任されることが多い。そのため、アメリカでの TA トレーニングは非常に活発に行われている(2006 宇田川)。近年の高等教育は、アメリカを手本として発展してきた。しかし、このような TA の活用法はそのまま日本で導入できるであろうか。そう考えたとき、積極的に TA の活用に取り出しているこれらの学科の調査は興味深い。北海道大学ではすでに、TA が 1 クラスを任されたり、講義の 1 部を担当したりしている授業がある。今後、このような TA の活用法が拡大していくものと思われるが、それにはさらなるトレーニングが必要であろう。このことを踏まえて、今回のデータを全学教育のケースと比較してみたいと思う。

3. アンケートの対象と調査用紙の配布および回収の方法

今回のアンケートは、全学教育科目に対して行った「TA の職務と生活の現状に関するアンケート調査」とほぼ同じ書式で行った(2007 宇田川)。

TA アンケートの対象は、平成 20 年 1 月において、工学部情報科学研究科、水産学部、獣医学部のいずれかに在籍し、学部専門科目を担当したすべての TA である。回収は教務課に設置してある回収箱に投函してもらったが、水産は函館キャンパスでの回収である。実際の質問項目は資料 1 のとおりである。それぞれの学科において、対象 TA 総数は 168 名、106 名、31 名で、回収数 95 通、54 通、29 通、回収率は 56.5%、50.9%、93.5% であった。

教員アンケートの対象は、平成 20 年 1 月において、工学部情報科学研究科、水産学部、獣医学部の、TA を採用したすべての教員である。回収は教務課に設置してある回収箱に投函してもらったが、

水産は函館キャンパスでの回収である。実際の質問項目は資料2 のとおりである。それぞれの学科において、対象教員総数 68 名, 43 名, 15 名に対し回収数 38 通, 32 通, 13 通で、回収率は 55.9%, 74.4%, 86.7% であった。

4. アンケート結果

4.1 TA

まず、TA の平均的なプロフィールを見てみる (表 1)。TA 全体に対する修士の割合は 71.3% である。平均年齢は 25.0 歳、性別は 75.3% が男、97.2% が独身である。担当科目数は年間平均 2.0 コマで、平均月収は 37,755 円である。

表 1. TA の職務と生活の現状に関するアンケート調査<基本項目>

	総合	情報	水産	獣医
問 1. 学年	n=178	n=95	n=54	n=29
修士 1 年	37.6%	49.5%	37.0%	-
修士 2 年	33.7%	36.8%	46.3%	-
博士 1 年	11.8%	7.4%	7.4%	34.5%
博士 2 年	6.7%	4.2%	7.4%	13.8%
博士 3 年	6.7%	2.1%	1.9%	31.0%
博士 4 年	3.4%	0.0%	0.0%	20.7%
問 2. 平均年齢	n=176	n=93	n=54	n=29
	25.0	24.0	25.0	28.0
問 3. 性別	n=178	n=95	n=54	n=29
男	75.3%	94.7%	59.3%	41.4%
女	24.7%	5.3%	40.7%	58.6%
問 4. 結婚	n=178	n=95	n=54	n=29
独身	97.2%	95.8%	98.1%	100.0%
既婚	2.8%	4.2%	1.9%	0.0%
問 5. 平均月収	n=165	n=87	n=49	n=29
	37,755	34,311	16,296	84,345

問 6. 平成 19 年度に TA を担当している専門科目の数(30 時間 ×)

	n=160	n=91	n=42	n=27
	2.0	1.0	2.0	4.0

次に、TA の仕事についてのアンケートを見てみる (表 2)。今回、アンケートの対象となった TA のうち、49.4% と約半数が以前に TA の経験がある。また、希望して TA を引き受けたのも 48.6% と半数近くである。自分が TA を担当した授業の受講学生数は平均で 39.0 人である。自分の担当科目であるにも関わらずシラバスを読んでいない TA は 34.8% もいる。TA の仕事について担当教員から“詳しい”指導を受けたのは 39.5% であるが、学生への接し方、態度、言葉遣いの指導を“何も”受けなかったのは 18.5% もいる。担当教員との相談時間は設定されていなかったが、いつでも相談が可能だったのは 73.3% と、設定していない場合が圧倒的に多い。仕事内容として、8 割近くの TA が経験するのは「実験・実習の準備」「実験・実習の際に学生への指導、助力」「学生の質問に答える」の 3 つである。また、授業時間外に TA は担当授業に関する仕事を週当たり平均 2.0 時間行っている。学生とうまく接することができたと感じているのは 85.7%、楽しかったと回答しているのが 89.8%、やりがいを感じたのは 82.0%、自分のメリットになったと感じたのは 91.5% と、TA の経験が充実したものとなっている様子である。また、仕事がうまくできたと感じているのは 85.3%、仕事が難しかったと答えているのは 43.8%、自分が学生に教える仕事が向いていると思ったのは 57.1% であり、今後も TA をやりたいと回答したのは 78.1% であった。

表 2. TA の職務と生活の現状に関するアンケート調査<TA の仕事について>

	総合	情報	水産	獣医
問 8. 今まで TA として働いた経験はあるか	n=176	n=94	n=53	n=29
はい	49.4%	35.1%	67.9%	62.1%
いいえ	50.6%	64.9%	32.1%	37.9%

問 9. TA 担当授業科目のシラバスを読んだことがあるか
n=178 n=95 n=54 n=29

詳しく読んだ	11.8%	11.6%	14.8%	6.9%
ざっと読んだ	53.4%	36.8%	61.1%	93.1%
読んでいない	34.8%	51.6%	24.1%	0.0%
その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 10. 担当科目の TA の仕事について担当教員からの指導を
n=177 n=94 n=54 n=29

詳しい指導を受けた	39.5%	46.8%	31.5%	31.0%
簡単な指導を受けた	56.5%	50.0%	64.8%	62.1%
何も受けなかった	4.0%	3.2%	3.7%	6.9%
その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 11. 学生への接し方や TA としてとるべき態度, 言葉遣いなどについて担当教員から指導を
n=178 n=95 n=54 n=29

詳しい指導を受けた	15.7%	13.7%	22.2%	10.3%
簡単な指導を受けた	65.2%	63.2%	63.0%	75.9%
何も受けなかった	18.5%	22.1%	14.8%	13.8%
その他	0.6%	1.1%	0.0%	0.0%

問 12. 授業時間以外の, 担当科目の TA の仕事の週当たり平均時間数
n=160 n=93 n=43 n=24

	2.0	1.0	4.0	1.0
--	-----	-----	-----	-----

問 13. 担当科目の TA をやって自分のメリットになったと
n=176 n=95 n=54 n=27

大いに思う	40.9%	36.8%	42.6%	51.9%
ある程度思う	50.6%	53.7%	51.9%	37.0%
あまり思わない	8.0%	9.5%	3.7%	11.1%
全く思わない	0.6%	0.0%	1.9%	0.0%

問 14. 担当科目の TA は自分が希望して引き受けたか
n=175 n=95 n=53 n=27

はい	48.6%	43.2%	41.5%	81.5%
授業担当教員に依頼された	29.1%	32.6%	30.2%	14.8%
指導教員に依頼された	22.3%	24.2%	28.3%	3.7%
その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 15. 今後も担当科目 (と同等) の TA の仕事を
n=173 n=92 n=54 n=27

是非またやりたい	27.2%	19.6%	24.1%	59.3%
できればやりたい	50.9%	54.3%	50.0%	40.7%
あまりやりたくない	11.6%	15.2%	11.1%	0.0%
やりたくない	3.5%	4.4%	3.7%	0.0%

わからない・その他 6.9% 6.5% 11.1% 0.0%

問 16. 担当科目の TA の仕事に含まれていた内容

実験・実習の準備	74.2%	60.0%	96.3%	79.3%
実験・実習の際に学生への指導, 助力	82.6%	88.4%	94.4%	41.4%
学生に講義する	9.6%	5.3%	22.2%	0.0%
セミナーや演習などのコメント・指導	10.7%	12.6%	7.4%	10.3%
採点・評価 (試験, 課題, 小テスト, クイズ, レポート, 論文など)	16.3%	22.1%	13.0%	3.5%
出席の記録をとる	30.9%	48.4%	13.0%	6.9%
学生の質問に答える	79.2%	85.3%	88.9%	41.4%
その他	1.1%	0.0%	0.0%	6.9%

問 17. 担当科目の TA として学生とうまく接することが
n=175 n=94 n=54 n=27

大変うまくできた	12.0%	8.5%	14.8%	18.5%
ややうまくできた	73.7%	73.4%	74.1%	74.1%
あまりうまくできなかった	11.4%	14.9%	11.1%	0.0%
うまくできなかった	0.6%	1.1%	0.0%	0.0%
学生と接することはなかった	1.1%	2.1%	0.0%	0.0%
その他	1.1%	0.0%	0.0%	7.4%

問 18. 担当科目の TA としての仕事はうまくできたか
n=176 n=95 n=54 n=27

大変うまくできた	14.8%	12.6%	20.4%	11.1%
ややうまくできた	70.5%	67.4%	70.4%	81.5%
あまりうまくできなかった	13.1%	18.9%	9.3%	0.0%
うまくできなかった	0.6%	1.1%	0.0%	0.0%
その他	1.1%	0.0%	0.0%	7.4%

問 19. TA の仕事に関して授業担当の教員との相談時間は設定されていたか
n=176 n=95 n=54 n=27

はい	17.0%	15.8%	24.1%	7.4%
いいえ	9.7%	7.4%	3.7%	29.6%
設定はされていなかったがいつでも相談が可能だった	73.3%	76.8%	72.2%	63.0%

問 20. 担当科目の TA をして楽しかったか
n=176 n=95 n=54 n=27

大変楽しかった	32.4%	25.3%	31.5%	59.3%
やや楽しかった	57.4%	61.1%	59.3%	40.7%
あまり楽しくなかった	9.7%	12.6%	9.3%	0.0%
全く楽しくなかった	0.6%	1.1%	0.0%	0.0%

問 21. 担当科目の TA としての仕事を行うのは難しかったか、簡単だったか

	n=176	n=95	n=54	n=27
大変難しかった	6.3%	5.3%	7.4%	7.4%
やや難しかった	37.5%	29.5%	44.4%	51.9%
あまり難しくなかった	48.3%	54.7%	46.3%	29.6%
全く難しくなかった	8.0%	10.5%	1.9%	11.1%

問 22. 担当科目の TA の仕事にやりがい

	n=178	n=95	n=54	n=29
大いに感じた	25.8%	22.1%	22.2%	44.8%
やや感じた	56.2%	52.6%	68.5%	44.8%
あまり感じなかった	15.2%	22.1%	7.4%	6.9%
全く感じなかった	2.8%	3.2%	1.9%	3.5%

問 23. 学生を教える仕事に自分が向いていると思うか

	N=177	n=95	n=54	n=28
大いに向いていると思う	13.0%	8.4%	5.6%	42.9%
やや向いていると思う	44.1%	48.4%	50.0%	17.9%
あまり向いていないと思う	40.1%	38.9%	42.6%	39.3%
全く向いていないと思う	2.8%	4.2%	1.9%	0.0%

問 24. 担当科目の受講学生数

	n=162	n=89	n=51	n=22
	39.0	34.0	46.0	41.0

次に、大学院生としての大学生活に関するアンケートである(表3)。85.8%の院生は大学生活が充実していると答えているが、最近忙しすぎると感じているのは79.2%もいる。人と接するのが好きだと答えているのは84.6%であり、このような人がTAになる傾向があるようである。大学院終了後の進路は43.3%が「企業・官公庁・行政法人などの職員」を希望しており、一番多い。

表3. TAの職務と生活の現状に関するアンケート調査<大学生活について>

	総合	情報	水産	獣医
問 25. 現在、大学院生の生活は	n=148	n=87	n=48	n=13

非常に充実している	30.4%	34.5%	22.9%	30.8%
やや充実している	55.4%	52.9%	56.3%	69.2%
あまり充実していない	9.5%	11.5%	8.3%	0.0%
全く充実していない	0.7%	0.0%	2.1%	0.0%
分からない	4.1%	1.2%	10.4%	0.0%

問 26. 大学院修了後(修士課程修了後)の進路の希望

進学・留学	14.6%	17.9%	16.7%	0.0%
大学の教員・研究者	11.2%	8.4%	9.3%	24.1%
研究所, 研究機関の研究者	10.1%	6.3%	13.0%	17.2%
企業・官公庁・行政法人などの職員(技術職, 研究職を含む)	43.3%	55.8%	44.4%	0.0%
小中高校の教員	2.8%	0.0%	3.7%	10.3%
その他	7.3%	7.4%	11.1%	0.0%

問 27. 人と接するのが

	n=149	n=87	n=49	n=13
大変好きだ	33.6%	33.3%	36.7%	23.1%
やや好きだ	51.0%	51.7%	42.9%	76.9%
あまり好きではない	14.1%	13.8%	18.4%	0.0%
好きではない	1.3%	1.2%	2.0%	0.0%

問 28. 最近、忙しすぎると感じることは

	n=149	n=87	n=49	n=13
いつも感じている	22.8%	18.4%	36.7%	0.0%
ときどき感じる	56.4%	57.5%	44.9%	92.3%
あまり感じない	17.4%	21.8%	14.3%	0.0%
全く感じない	3.4%	2.3%	4.1%	7.7%

4.2 教員

まず、TAを使用した教員のプロフィールを見つめる(表4)。性別は98.8%が男性、平均年齢は43.3歳で、大学の授業で教えている通算年数は平均12.6年である。職階は准教授が約60%で最も多く、教授と助教がそれぞれ約20%である。'07年度に使用しているTAの延べ人数は平均3.7人である。

表4. TA指導教員の職務の現状に関するアンケート調査<基本項目>

総合	情報	水産	獣医	
問1. 通算何年間大学の授業で学生を教えているか	n=83	n=38	n=32	n=13
	12.6	11.3	14.3	12.2
問2. 平均年齢	n=83	n=38	n=32	n=13
	43.3	41.2	46.1	42.6
問3. 性別	n=83	n=38	n=32	n=13
男	98.8%	97.4%	100.0%	100.0%
女	1.2%	2.6%	0.0%	0.0%
問4. 職階	n=83	n=38	n=32	n=13
教授	20.5%	23.7%	12.5%	30.8%
准教授	59.0%	47.4%	71.9%	61.5%
講師	1.2%	0.0%	3.1%	0.0%
非常勤講師	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
助教	19.3%	28.9%	12.5%	7.7%
問5. '07年度に使用しているTAののべ人数 30時間×	n=74	n=36	n=26	n=12
	3.7	3.1	4.1	4.5

次に、担当科目に関する項目をみる(表5)。TAを使用している授業の受講学生数は平均45.7人である。この授業を担当している理由は78.0%が「もともと自分の担当科目である」で、この授業にやりがいを感じているのは97.6%である。7割以上の教員は、TAを使用するために、授業内容や手法を変更したり、意識したりしている。この授業を行うために費やされる時間は全職務時間の12.5%となっている。TAに対して、授業内容に関する教育指導を、十分に行っているのは45.8%、簡単に行っているのは48.2%である。学生に対する態度、礼儀、言葉遣いの指導を、十分に行っているのは10.8%、簡単に行っているのは59.0%である。TAの指導に自信があると回答しているのは79.5%である。TAにさせている仕事は、「学生指導・質問への対応」が90.4%と最も多く、次いで「授業の準備」の68.7%である。TAとの打ち合わせ時間は、週当たり平均1.2時間であり、TAの拘束時間を超えない

ように意識しているのは80.5%である。TAが役に立ったと思っているのは100%、TAの授業補佐能力に満足しているのは90.3%、TAの使用は必要と思っているのは100%であり、今後もTAを使い続けたいのは98.8%である。

表5. TA指導教員の職務の現状に関するアンケート調査<担当科目について>

	総合	情報	水産	獣医
問7. 担当科目のTAに対して、授業内容に関して教育指導を	n=83	n=38	n=32	n=13
十分な指導を行っている	45.8%	42.1%	56.3%	30.8%
簡単な指導を行っている	48.2%	50.0%	43.8%	53.8%
あまり指導は行っていない	4.8%	7.9%	0.0%	7.7%
指導は全く行っていない	1.2%	0.0%	0.0%	7.7%
問8. 担当科目のTAに対して、学生に対する態度、礼儀、言葉遣いなどの指導を	n=83	n=38	n=32	n=13
十分な指導を行っている	10.8%	13.2%	9.4%	7.7%
簡単な指導を行っている	59.0%	42.1%	78.1%	61.5%
あまり指導は行っていない	24.1%	36.8%	12.5%	15.4%
指導は全く行っていない	6.0%	7.9%	0.0%	15.4%
問9. 担当科目でTAにはどのような仕事をさせているか(複数回答可)				
授業の準備(実験、実習、演習など)	68.7%	47.4%	84.4%	92.3%
出欠の確認・記録	26.5%	44.7%	3.1%	30.8%
レポート、宿題、課題などの評価・採点	16.9%	18.4%	12.5%	23.1%
学生指導・質問への対応	90.4%	94.7%	96.9%	61.5%
討論の司会	3.6%	2.6%	3.1%	7.7%
講義(の一部)を担当	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
問10. 担当科目のTAがその職務を上手に遂行できるように教育・指導することに関してどのくらい自信があるか	n=83	n=38	n=32	n=13

大いに自信がある	31.3%	23.7%	40.6%	30.8%
やや自信がある	48.2%	55.3%	46.9%	30.8%
あまり自信がない	13.3%	13.2%	9.4%	23.1%
全く自信がない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
特に教育・指導の必要がない	7.2%	7.9%	3.1%	15.4%

問 11. 担当科目で TA を使用した感想
n=83 n=38 n=32 n=13

大変役に立った	79.5%	84.2%	78.1%	69.2%
やや役に立った	20.5%	15.8%	21.9%	30.8%
あまり役に立たなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
全く役に立たなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
特に感想はない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 12. TA との打ち合わせの週当たりの平均時間数 (指導を含む)
n=81 n=37 n=31 n=13

	1.2	1.0	1.5	1.1
--	-----	-----	-----	-----

問 13. TA を使用するにあたって拘束時間(契約労働時間)を超えないように意識していたか
n=82 n=38 n=31 n=13

はっきり意識していた	47.6%	57.9%	41.9%	30.8%
やや意識していた	32.9%	31.6%	38.7%	23.1%
あまり意識していなかった	17.1%	10.5%	19.4%	30.8%
全く意識していなかった	2.4%	0.0%	0.0%	15.4%

問 14. TA の使用は必要か
n=83 n=38 n=32 n=13

ぜひ必要である	86.7%	92.1%	84.4%	76.9%
やや必要である	13.3%	7.9%	15.6%	23.1%
あまり必要ではない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
全く必要ではない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 15. この授業を実施するにあたって、使用している TA の授業補佐能力に満足か
n=83 n=38 n=32 n=13

大いに満足	54.2%	65.8%	46.9%	38.5%
やや満足	36.1%	31.6%	34.4%	53.8%
やや不満	9.6%	2.6%	18.8%	7.7%
大いに不満	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 16. 今後も TA を使い続けたいか
n=83 n=38 n=32 n=13

はい	98.8%	100.0%	96.9%	100.0%
----	-------	--------	-------	--------

いいえ 1.2% 0.0% 3.1% 0.0%

問 17. TA を使用するのに都合が良いように授業の内容や授業の仕方を、使用前と比べて変更したり、意識したりしているか
n=82 n=37 n=32 n=13

大いに変更・意識している	28.0%	27.0%	21.9%	46.2%
やや変更・意識している	43.9%	32.4%	62.5%	30.8%
あまり変更・意識していない	22.0%	32.4%	12.5%	15.4%
全く変更・意識していない	2.4%	0.0%	3.1%	7.7%

問 18. この授業を担当している理由
n=82 n=37 n=32 n=13

もともと自分の担当科目である	78.0%	64.9%	84.4%	100.0%
学部(学科)の持ち回りで担当している	20.7%	35.1%	12.5%	0.0%
責任はないが自分で望んで担当した	1.2%	0.0%	3.1%	0.0%

問 19. この授業を担当してどのくらい「やりがい」を感じているか
n=82 n=37 n=32 n=13

大いに感じている	67.1%	56.8%	68.8%	92.3%
やや感じている	30.5%	40.5%	28.1%	7.7%
あまり感じていない	2.4%	2.7%	3.1%	0.0%
全く感じていない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

問 20. この授業を行なうために使っている時間(準備, 予習, 評価などを含む)の、全職務時間に対する比率
n=82 n=38 n=31 n=13

12.5% 9.3% 12.9% 21.2%

問 21. 担当科目の受講学生数
n=78 n=33 n=32 n=13

45.7 40.6 52.3 42.4

では、一般的な質問に対するアンケート結果を見てみる(表6)。今学期までの TA 使用経験は平均で 7.8 回である。学生時代に TA を使用した授業を受けたことがあるのは 22.5% であり、自分が TA として働いた経験があるのは 29.1%、そして、TA の経験は院生にとって有用であると回答したのは 86.3% である。授業の仕方についての研修や教育

を受けたことがあると回答したのは 62.8% である。学生を教えることが好きだと回答したのは 93.8% である。

表 6. TA 指導教員の職務の現状に関するアンケート調査<一般的質問>

	総合	情報	水産	獣医
問 22. 今までに TA として働いた経験があるか n=79 n=35 n=32 n=12				
はい	29.1%	42.9%	12.5%	33.3%
いいえ	70.9%	57.1%	87.5%	66.7%
問 23. 大学院生が TA を経験することは大学院生にとって有用であると思うか n=80 n=35 n=32 n=13				
はい	86.3%	91.4%	81.3%	84.6%
いいえ	2.5%	2.9%	3.1%	0.0%
どちらとも言えない	11.3%	5.7%	15.6%	15.4%
問 24. 今学期までの TA 使用経験回数 n=79 n=35 n=31 n=13				
	7.8	6.6	8.9	8.2
問 25. 今まで TA を使った授業を学生の立場で受けた経験が n=80 n=35 n=32 n=13				
ある	22.5%	40.0%	6.3%	15.4%
ない	77.5%	60.0%	93.8%	84.6%
問 26. 授業の仕方について研修や教育を受けたことが n=78 n=34 n=31 n=13				
ある	62.8%	52.9%	80.6%	46.2%
ない	37.2%	47.1%	19.4%	53.8%
問 27. 一般に、学生を教えること（教育すること）が n=80 n=35 n=32 n=13				
大変好きだ	45.0%	34.3%	59.4%	38.5%
やや好きだ	48.8%	60.0%	37.5%	46.2%
あまり好きではない	6.3%	5.7%	3.1%	15.4%
全く好きではない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

5. 全学教育との比較

比較を行うのであれば、全学教育と専門科目で同時にアンケートをとるのが望ましいが、これらのアンケートの実施には 2 年間のタイムラグがある。よって、急速に変化しつつある大学院においては、時間差による変化もある程度入ってしまうかも知れない。特に近年の特徴として、博士課程への進学を避ける院生が増えてきている。それは、民間就職にはマイナスとなる可能性や、アカデミックポストに就ける可能性の低さからくるものと思われる。単純に比べると、進路の希望として「企業・官公庁・行政法人」を選択した修士の学生は、2006 年度全学教育 TA では 44.5%、2008 年度専門科目 TA では、43.3% であり、民間就職希望者が急速に増加している傾向はみられない。しかし、そもそも専門科目 TA の方が民間就職希望者は少ないが、前述の傾向により若干増加して差が見られなくなった可能性は否めないのである。しかし、ここでは時間的な違いは無視し、単純に両アンケートを比較していくことにする。

5.1 TA

所属学年に関しては、全学教育 TA の場合、修士 2 年は 1 年の 3 倍以上であったが、専門科目 TA では逆に、修士 2 年は平均で 33.7% と 1 年を下回った。これは、自分の在籍する学部においては、教員と院生の意思疎通により、修士 2 年は修士論文作成で多忙のため院生が TA を引き受けない、もしくは教員が依頼しない傾向があると思われる。ただし、獣医学科は修士課程がないため、統計には加えていない。また、博士課程においてもこの傾向は見られ、全学教育では博士 1 年、2 年、3 年とほぼ差は見られないが、専門科目では、博士 3 年は、情報 2.1%、水産 1.9% と、TA を控える傾向がある。これも、獣医学科は博士課程が 4 年制であるため加えていない。これらの結果は、問 21「担当科目の TA としての仕事を行うのは難しかったか」の質問の回答に関係がありそうだ。難しかったと回答したのは全学教育 27.9% に対し、専門教育 43.8% であり、専門教育の TA の方が手間がかかる場合が多いと思われる。

仕事の内容については、学科によって違いがある

が、「実験・実習の際に学生への指導・助力」は全学教育で65.7%であるのに対し、専門教育では情報88.4%、水産96.3%と実験のTAが多くなっていることが分かる。ただし、獣医学部では41.4%と全学教育とも他の専門教育とも異なっている。「学生の質問への回答」についても、全学教育75.6%、情報85.3%、水産88.9%に対し、獣医41.4%と半数程度である。

最後に、問23「学生を教える仕事に自分が向いていると思うか」の質問に現れた違いを見てみる(図1)。全学教育では「やや向いている」を約50%の頂点とし、「大いに向いている」と「あまり向いていない」が約20%に下がる正規分布型をなしている。これに対し、専門教育での情報、水産は「あまり向いていない」が約40%もあり、「大いに向いている」が10%以下になっている。全学教育に比べて専門教育のTAでは“向いていない”傾向にシフトしている。これは全学教育の場合よりも仕事が難しく、すんなりとこなすことができない割合が高くなるためではないだろうか。一方、獣医に関しては、分布がジグザグをなすという独特なものになっており、特に「大いに向いている」が最も高い割合であるところは興味深い。獣医のTAの仕事内容が、全学教育や他学部とは異なる分布をなしていることからわかるように、独自の活用がなされているものと思われる。なぜこのような分布ができるのか、獣医TAの役割やトレーニング法の調査が望まれる。

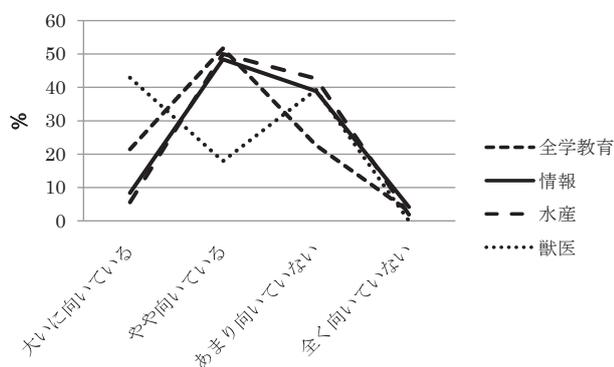


図1. 学生を教える仕事に自分が向いていると思うか

5.2 教員

まず、教員のバックグラウンドを問う問22「TAとして働いた経験がありますか」という質問への回答に違いが現れた。全学教育では「ある」が13.6%であったが、専門教育では29.1%である。TAの活用に力を注いでいるこれらの3学科では、当初からTAを活用しており、かつTAという経験をとおして教員になったケースが倍以上になっているのである。これはTAの目的「大学院生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会」に合致したものであり、今後のTAのあり方について、これらの3学科に注目する価値が高いことがわかる。

この傾向は、問26「授業の仕方について研修や教育を受けたことが」の質問への回答にも表れている。「ある」と回答したのが全学教育で43.3%、専門教育では62.8%である。もちろん、TA時代に研修を受けたとは限らず、教員になってからFD研修会などに参加した場合も含まれているだろう。

問7「担当科目のTAに対して、授業内容に関して教育指導を」の質問に対して、「十分な指導を行っている」と回答したのが、全学教育では15.8%に対して、専門教育では45.8%である。実際にその学部で必要になる即戦力を養うような研修が行われていることがうかがえる。

問9「担当科目でTAにはどのような仕事をさせているか」の質問に対し、全学教育で「出欠の確認・記録」64.4%、「レポート、宿題、課題などの評価・採点」42.6%と高い割合であったものが、専門教育ではそれぞれ、26.5%、16.9%に抑えられ、全学教育では66.0%だった「学生指導・質問への対応」が、専門教育では90.4%となった。専門教育では、実習や実験でのTAの活用が多いことがわかる。

「この授業を担当してどのくらい「やりがい」を感じているか」は、「大いと感じている」が全学教育で48.1%に対し、専門教育では67.1%である。これは、全学教育では、学科の持ち回りで授業を担当することになった割合が専門教育の場合の倍以上になっており、必ずしもやりたい授業とは限らないことが影響していると思われる。

6. 講義をしたTAについての考察

ここで、問 16 において「学生に講義をする」という仕事をした 17 名の TA に注目してみる。現在の日本における TA は教員の補助をすることが多く、授業のメインの部分である講義を行うのは特殊な例である。

まず、講義を行った TA はどのような感想をもったのかを見てみる。

項目	%	人数
担当科目の TA として学生とうまく接することができたと思う	100.0%	17 人
担当科目の TA としての仕事はうまくできたと思う	100.0%	17 人
担当科目の TA をして楽しかった	100.0%	17 人
担当科目の TA の仕事にやりがいを感じた	100.0%	17 人

学生に講義をするという、裏方のイメージではなく、通常教員が授業時間中に行なう仕事を任された場合、大変な仕事でありながら TA は全員うまく仕事を行い、やりがいや楽しさを感じている。

しかし、教員でさえ失敗しながら行っている講義をいきなりうまくできるものであろうか。講義をした TA の中で、以前に TA 経験があるかどうかを見てみる。

項目	%	人数
今まで TA として働いた経験はある	76.5%	13 人

多くは TA 経験があると答えているが、約 1/4 は大学の講義に携わったことはない。TA 経験があるひとも、以前の TA の仕事に講義が含まれているとは限らず、それにも関わらず、100% がうまくこなし、やりがいを感じているのである。

しかし、講義といっても教員は比較的やりやすい部分を TA にまかせる傾向があるのではないだろうか。それでは、講義をした TA に対する「仕事は難しかったか」「自分が教えることに向いていると思

うか」という 2 つの質問の回答分布を見てみる。

項目	%	人数
担当科目の TA としての仕事を行なうのは難しかった	58.8%	10 人
あなたは学生を教える仕事に自分が向いていると思う	47.1%	8 人

約半数は仕事が難しかったにも関わらずうまくこなし、また、うまくこなしただけでも関わらず、自分が学生を教える仕事に向いていないと感じているのである。しかし、これはよい傾向ではないだろうか。講義の容易な部分を任せられうまくいき、講義なんて簡単であり、自分は教員に向いていると感じてしまう方が有害であろう。講義は上手くやったが、それは努力を要してどうにかやり遂げたものであり、元々自分に適性があるという自覚のある TA が多くいるということである。これは、おそらく多くの教員が普段授業で感じていることであろう。

このデータは、これからの日本の大学における TA のあり方の手がかりとなるかも知れない。というのは、アメリカでは、TA は教員と同じように 1 人でクラスを任される場合が多い。日本の TA に付きまとう「教員のためのお手伝いさん」的なイメージを超えた扱いである。日本でこのような方式を取り入れるには、現在の TA の賃金が授業を担当する者に相応しいものではないなどの問題がある。しかし、教員レベルの仕事を責任感を持ってやらせることにより、TA はやりがいや充実感を持ち、大きく成長するのではないだろうか。そして、TA はトレーニング次第で、講義にも対応できる状態にあることを示唆しているように見える。

現在、北海道大学では「情報学 I」という情報リテラシーの授業を TA 1 人に任せている。しかし、この場合、かなり詳細に授業内容は決められており、専用のテキストや e-ラーニングシステムが整えられて初めて行うことができている。このように、TA に講義を任せるにあたって、授業の質保証を確保するためには、それなりの準備とその科目の TA トレーニングの相当な強化が必要不可欠であること

は言うまでもない。

北海道大学では、全国に先駆けて TA 研修を強化してきた経緯があり、それはそもそも海外の大学の TA トレーニングの調査に基づいて行ってきた。そして、現在の北海道大学の TA 研究会は規模、質ともに海外のものに引けを取らないものになっている。初等、中等教育とは異なり、教育のトレーニングを全く積まずに教員になってしまう場合が多い高等教育に関しては、TA を将来の教員養成という意味合いで現場の経験をさせる意義は大きい。

ところで、今回のデータは、TA 研修に力を入れている 3 学部のものであり、講義をした TA の総数 17 名でのデータであり、サンプル数が少ない。また、今回の調査には入っていない、特に TA 研修を行っていない学部において講義をした TA もいるはずであり、そこからは全く異なったアンケート結果がでるのかもしれない。全学部で専門教育科目における講義を行った TA に対するアンケート調査が望まれる。

一方、教員アンケートにおける問 9 「担当科目で TA にはどのような仕事をさせているか」において、「講義 (の一部) を担当」は 3 学部ともに 0% である。これは、学生アンケートとは食い違うものであるが、おそらく教員には、TA に講義をさせることは教員として手を抜いているように見られるという認識があり、意見として出てこないのではないだろうか。

TA を使用する教員によって TA の仕事内容や負担度は大きく異なる。特に、TA が講義を行った場合には、どの程度の講義を行ったのかは大きく差があると思われる。TA がどのように使用されているかを把握するためには、実際に授業に実態調査に行くことが望まれる。しかし、これは一般に授業参観制度を導入することと関連してくるであろう。

7. まとめ

全学教育科目の TA と比較して、今回の専門科目のデータを眺めると、以下のような流れが見えてくる。まず、専門科目では、実験・実習が中心であり、内容も全学教育科目にくらべ難しくなっており、TA の仕事としての難度は高くなっている。それに

より、研究活動で多忙な博士課程の学生は TA をやらない傾向がある。また、実際に TA を行った学生は、教えることの難しさを実感する。これに対し、専門教育科目の TA を使用する教員は、十分な TA 指導を行う傾向があるが、その背景には、教員自身が学生時代に TA を経験している割合が高く、脈々と TA 指導が引き継がれてきている構造があることがうかがえる。また、全学教育科目に比べ、授業にやりがいを感じている教員が多く、TA 指導にも力が入るのではないだろうか。

今回、アンケートを依頼した 3 学科は、あくまで TA の研修や活用に秀でたところであり、一般的な専門教育の TA に関するデータではない。他の学部では、まだ効果的に TA を活用することができていないところもあるであろう。今回の TA アンケートの最後には、問 29 として自由記述欄が設けられており、今回調査した学部でさえ、「たいしたことをしていないのに、こんなに給料が出ていいのだろうか」、「時間外労働が多く、給料に見合わない」という意見があった。これらは相反する意見であるが、一昔前の専門教育では、TA を使用する教員によって、ものすごく雑用を押しつけられたり、何もすることがなかったりと、極端に異なる場合がよく見受けられたものである。しかし、このような問題は TA をしている院生に否があるのではなく、制度や使用する教員の問題である。そして、TA を使用する教員は、院生が TA は教育実習のようなものであるという自覚を持てるような環境を作らなければならないし、教員は TA をお手伝いさんとして使用するのではなく、将来の教育者のためのトレーニングとして意識した使い方をしなければならない。

今回のアンケートからみえてきたのは、全学教育にくらべ、専門教育 TA の仕事内容は難しいものになっており、仕事の内容が難しい場合はより研修が必要になっているという必然性である。そして、TA を必要としている学科は早くから TA を利用したカリキュラム体制を作り、TA 経験や教育研修経験のある教員の割合が多く、その教員がまた TA の指導を行っていくという伝統的な必然性がある。

それでは一般に、TA に教育者養成としての意味合いを持たせるためには、その必然性が必要となる。それは、教員採用条件における教育能力の重視

に他ならないのではないか。高等教育先進国であるアメリカでは、教員採用応募書類としてティーチングポートフォリオという自分の教育歴を提出するのが普通である。そして教員は昇進や移動に備えて、ポートフォリオに加えることで自己アピールできる題材を求め、常に教育に関心をもっている場合が多い。日本ではまだそのような環境にないが、最近ではすでに採用において教育歴が重視される傾向が強まっていることを院生に伝え、意識改革していくことが必要であると思う。

日本の大学においても現在アメリカでそうであるように、TAが1人で授業を担当し、TA歴を履歴書に記入することで、教員採用の選考に影響を及ぼすようになっていくものと思われる。そのような状況になった場合、TAを引き受けるのは、現在TAを引き受けている院生とは必ずしも同じタイプとはいえないであろう。というのも、現在の日本においては、TAは教員の補助程度の仕事をする場合がほとんどであり、TAを自分のアカデミックキャリアのためと考えて引き受ける院生は非常に少ないのではないだろうか。たとえば、研究が忙しいからTA

をやらなかったタイプの院生も、TAという履歴が将来のアカデミックポストへの就職に影響するのであれば、喜んで引き受けるようになると思われる。よって、もしこの種のアンケートを資料としてTA制度を改革していく場合でも、そのたびにTA対象者の層が変わってくる可能性があるため、そのたびに調査する必要がある。

参考文献

- 宇田川拓雄 (2007), 「TA よ , 大志を抱け—北大 TA アンケート調査結果の分析と考察—」, 『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』, 15, 113-131
- 小笠原正明・西森敏之・瀬名波栄潤 (編) (2006), 『TA 実践ガイドブック』, 玉川大学出版会, 154
- 宇田川拓雄 (2006), 「カリフォルニア州立大学バークレー校における TA システム」, 『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』, 14, 129-141

資料 1

平成 20 年 1 月

T A の職務と生活の現状に関するアンケート調査

T A になった大学院生の方へ

- ・このアンケートは 2007 年度に学部専門科目の T A になった大学院生全員にお送りしています。
- ・集計結果は T A 研修の改善と研究分析に使用します。個人データが公表されることはありません。
- ・回答は封筒に入れ教務係に設置してある回収箱に 1 月 31 日までに投函してください。

高等教育機能開発総合センター・高等教育開発研究部

(該当する番号に○を付けるか、数字等を記入してください。以下同じ)

<基本項目>

- 問 1 所属, 学年: () 研究科・学院等 (・修士 ・博士) 課程 () 年
- 問 2 年齢 () 歳
- 問 3 性別 1 男 2 女
- 問 4 結婚 1 独身 2 既婚
- 問 5 平均月収 () 円
- 問 6 2007 年度に T A を担当している専門科目の数 30 時間 × () 科目 (総数)

< T A の仕事について >

(複数科目を担当した方は、お手数ですが、担当した科目数だけ回答を作成してください。用紙はコピーしてください。)

回答 () 枚のうち () 枚目

問 7 担当授業科目名 ()

問 8 今まで T A として働いた経験はありますか。

- 1 はい 2 いいえ

問 9 T A 担当授業科目のシラバスを読んだことがありますか。

- 1 詳しく読んだ 2 ざっと読んだ
3 読んでいない 4 その他 ()

問 10 担当科目の T A の仕事 (授業補佐, 準備作業, 採点など) について, 担当教員から指導を受けましたか。

- 1 詳しい指導を受けた 2 簡単な指導を受けた
3 何も受けなかった 4 その他 ()

問 11 学生への接し方や T A としてとるべき態度, 言葉遣いなどについて担当教員から指導を受けましたか。

- 1 詳しい指導を受けた 2 簡単な指導を受けた
3 全く受けなかった 4 その他 ()

問 12 授業時間以外に, 担当科目の T A の仕事 (実験の準備, 打ち合わせ, 採点, 質問への対応など) を週当たり平均何時間ぐらい行っていましたか。

() 時間 (行っていない人は0時間)

問13 担当科目のTAをやって自分のメリットになったと思いますか。

- 1 大いに思う
- 2 ある程度思う
- 3 あまり思わない
- 4 全く思わない

問14 担当科目のTAは自分が希望して引き受けましたか。

- 1 はい
- 2 授業担当教員に依頼された
- 3 指導教員に依頼された
- 4 その他 ()

問15 今後も担当科目 (と同等) のTAの仕事をしたいですか。

- 1 是非またやりたい
- 2 できればやりたい
- 3 あまりやりたくない
- 4 やりたくない
- 5 分からない・その他 ()

問16 担当科目のTAの仕事に次のような内容が含まれていましたか (義務ではなかったが実際に行なったことを含みます)。(複数回答可)

- 1 実験・実習の準備
- 2 実験・実習の際に学生への指導・助力
- 3 学生に講義する
- 4 セミナーや演習などのコメント・指導
- 5 採点・評価 (試験, 課題, 小テスト, クイズ, レポート, 論文など)
- 6 出席の記録をとる
- 7 学生の質問に答える
- 8 その他 ()

問17 担当科目のTAとして学生とうまく接することができたと思いますか。

- 1 大変うまくできた
- 2 ややうまくできた
- 3 あまりうまくできなかった
- 4 うまくできなかった
- 5 学生と接することはなかった
- 6 その他 ()

問18 担当科目のTAとしての仕事はうまくできたと思いますか。

- 1 大変うまくできた
- 2 ややうまくできた
- 3 あまりうまくできなかった
- 4 うまくできなかった
- 5 その他 ()

問19 TAの仕事に関して授業担当の教員との相談時間は設定されていましたか。

- 1 はい
- 2 いいえ
- 3 設定はされていなかったがいつでも相談が可能だった

問20 担当科目のTAをして楽しかったですか。

- 1 大変楽しかった
- 2 やや楽しかった
- 3 あまり楽しくなかった
- 4 全く楽しくなかった

問21 担当科目のTAとしての仕事をこなすのは難しかったですか, 簡単だったですか。

- 1 大変難しかったです
- 2 やや難しかったです
- 3 あまり難しくなかった
- 4 全く難しくなかった

問 2 2 担当科目の T A の仕事にやりがいを感じましたか。

- | | |
|-------------|------------|
| 1 大いに感じた | 2 やや感じた |
| 3 あまり感じなかった | 4 全く感じなかった |

問 2 3 あなたは学生を教える仕事に自分が向いていると思いますか

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 大いに向いていると思う | 2 やや向いていると思う |
| 3 あまり向いていないと思う | 4 全く向いていないと思う |

問 2 4 担当科目の受講学生数は何人ですか。() 人

<大学生活について>

(以下については、回答は 1 枚で結構です。)

問 2 5 現在、充実した大学院生の生活をしていますか。

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 非常に充実している | 2 やや充実している |
| 3 あまり充実していない | 4 全く充実していない |
| 5 分からない | |

問 2 6 大学院修了後の進路の希望を教えてください (修士の人は修士課程修了後)。

- | | |
|---------------------------------|-------------|
| 1 進学・留学 | 2 大学の教員・研究者 |
| 3 研究所、研究機関の研究者 | |
| 4 企業・官公庁・行政法人などの職員 (技術職、研究職を含む) | |
| 5 小中高校の教員 | 6 その他 () |

問 2 7 あなたは人と接するのが好きですか。

- | | |
|-------------|----------|
| 1 大変好きだ | 2 やや好きだ |
| 3 あまり好きではない | 4 好きではない |

問 2 8 最近、忙し過ぎると感じることはありますか。

- | | |
|------------|-----------|
| 1 いつも感じている | 2 ときどき感じる |
| 3 あまり感じない | 4 全く感じない |

問 2 9 T A の仕事に関する意見がございましたら書いてください。(自由回答)

資料2

平成20年1月

TA指導教員の職務の現状に関するアンケート調査

TAを使用している先生へ

- ・このアンケートは2007年度の学部専門科目でTAを採用している先生方全員にお願いしています。
- ・集計結果はTA研修の改善と研究分析に使用します。個人データが公表されることはありません。
- ・回答は封筒に入れ教務係に設置してある回収箱に1月31日までに投函してください。

高等教育機能開発総合センター・高等教育開発研究部

(該当する番号に○を付けるか、数字等を記入してください。以下同じ)

<基本項目>

- 問1 大学で何年間、授業で学生を教えていますか(通算)。()年
 問2 年齢 ()歳
 問3 性別 1 男 2 女
 問4 職階 1 教授 2 准教授 3 講師 4 非常勤講師 5 助教
 問5 2007年度に使用しているTAの数 30時間×()人(のべ数)

<担当科目について>

(複数科目でTAを採用している方は、お手数ですが、担当科目ごとに回答を作成してください。用紙はコピーしてください。)

回答()枚のうち()枚目

問6 担当授業科目名()

問7 担当科目のTAに対して、授業内容に関して教育指導を行っていますか。

- 1 十分な指導を行っている 2 簡単な指導を行っている
 3 あまり指導は行っていない 4 指導は全く行っていない

問8 担当科目のTAに対して、学生に対する態度、礼儀、言葉遣いなどの指導を行っていますか。

- 1 十分な指導を行っている 2 簡単な指導を行っている
 3 あまり指導は行っていない 4 指導は全く行っていない

問9 担当科目でTAには次のどのような仕事をさせていますか。複数のTAを使用し、異なる仕事をさせている場合は、それぞれについてお答えください。(複数回答可)

- 1 授業の準備(実験、実習、演習など)
 2 出欠の確認・記録
 3 レポート、宿題、課題などの評価・採点
 4 学生指導・質問への対応
 5 討論の司会
 6 講義(の一部)を担当
 7 その他()

問10 あなたは担当科目のTAがその職務を上手に遂行できるように教育・指導することに関してどのくらい自信がありますか。

- 1 大いに自信がある
- 2 やや自信がある
- 3 あまり自信がない
- 4 全く自信がない
- 5 特に教育・指導の必要がない

問11 担当科目でTAを使用した感想は次のどれですか。

- 1 大変役に立った
- 2 やや役に立った
- 3 あまり役にたたなかった
- 4 全く役にたたなかった
- 5 特に感想はない

問12 この授業について、TAとの打ち合わせの時間（指導を含む）はどのくらいとっていましたか。
 (週当たり平均) () 時間

問13 この授業でTAを使用するにあたって拘束時間（契約労働時間）を超えないように意識していましたか。

- 1 はっきり意識していた
- 2 やや意識していた
- 3 あまり意識していなかった
- 4 全く意識していなかった

問14 この授業で、TAの使用は必要ですか。

- 1 ぜひ必要である
- 2 やや必要である
- 3 あまり必要ではない
- 4 全く必要ではない

問15 この授業を実施するにあたって、使用しているTAの授業補佐能力に満足ですか。

- 1 大いに満足だ
- 2 やや満足だ
- 3 やや不満だ
- 4 大いに不満だ

問16 今後もこの授業でTAを使い続けたいですか。

- 1 はい
- 2 いいえ

問17 この授業でTAを使用するのに都合が良いように授業の内容や授業の仕方を、使用前と比べて変更したり、意識したりしていますか。

- 1 大いに変更・意識している
- 2 やや変更・意識している
- 3 あまり変更・意識していない
- 4 全く変更・意識していない

問18 この授業を担当している理由は次のどれですか。

- 1 もともと自分の担当科目である
- 2 学部（学科）の持ち回りで担当している
- 3 責任はないが自分で望んで担当した

問19 あなたはこの授業を担当してどのくらい「やりがい」を感じていますか。

- 1 大いに感じている
- 2 やや感じている
- 3 あまり感じていない
- 4 全く感じていない

問20 この授業を行なうために使っている時間（準備、予習、評価などを含む）の、全職務時間に対する比率を教えてください。

() %

問21 担当科目の受講学生数は何人ですか。 () 人

